壺井栄論 ――「石臼の歌」を中心に――

A New Look at Tsuboi Sakae's Work With Special Reference to Ishiusu no Uta

新名主　健一
Ken'ichi Shinmiyôuzu

（一九九四年十月十七日　受理）

はじめに

壺井栄（一八九九～一九六七）の作品「石臼の歌」は一九四五年に「少女倶楽部」（八・九月合併号・九月一日発行）に発表された。壺井栄四六歳の時の作品である。広島に原爆が投下され、間もなく敗戦という動乱期に、しかもきわめて短時間のうちに戦争の悲惨さを見すえ、平和の尊さを訴えている作品である。動乱の期に、しかもわずかな時間で作品をものにした壺井栄の作家としての資質を感じさせる作品である。

しかしながら、私はこの作品を何度読んでも釈然としない思いにかられる。それは、ひとつには結末部があからさまな激励的文章の型になっていて、いかにも決意表明作文みたいな不自然さを感じることからくる。もうひとつには、「勉強せえ、勉強せえ、つらいことでもがまんして――。」と石臼は歌うが、作品の論理から考えると、おばあさんの言った「うすは、そのときそのときの人間の心持ちをそのまま歌いだすものだよ。」（傍点……引用者）ということばからすると、その時臼をひいていた千枝子の心持ちをそのまま歌ったものということになる。

石臼が歌うのは作品の中で三回でてくる。一回目はおばあさんが歌う歌のとおりに歌う「だんごがほしいぞ、臼まわそ。」で二回目は千枝子が一人で回すときに「お姉さんだよ、お姉さんだよ。」と歌う。三回目は千枝子と瑞枝が二人で回すときの「勉強せえ、勉強せえ、つらいことでもがまんして――。」と歌い始める場面である。一回目、二回目は、おばあさんの言った「臼は……（略・引用者）そのまま歌い出すものだよ。」のことばと整合するが、三回目を千枝子の心持ちそのままと取るには無理がある。それは、「――せえ、――せえ」は、子供である千枝子の使うことばではないと思われる

からである。石うすが擬人化されて、作者や造物主の思いを吐き出したとも取れるが、これは作品の論理上、作品の中に決め手を求めることができない。さらには、「勉強せえ、勉強せえ」と出てくる「勉強」という語の唐突さである。少なくとも私には突然飛び出してきたとしか読めない。

そこで、この作品の結末部分について、私の思っているような疑問に触れた研究があるのではないかと調べてみた。私の抱いている疑問とは異なるが、国語科教育の分野では多少疑問も出されたという文献はあったが[注1]、国文学関係の分野では皆無であった。宮沢賢治の作品が作品論として、かなり多方面から研究されているのに、壺井栄の作品はある枠組みの中でだけ読まれているようである[注2]。

国語科教育の分野での教材としての妥当性については稿を新たにして所信をのべたい。ここでの私の問題提起の眼目は、結末部分の不自然さの指摘である。その不自然さを解明するために「勉強」という語に注目した。ひょっとして壺井栄は「勉強」という語を他の作品でも使っているのではないのか、しかも、かなりひんぱんに……という予想を持った。そこで、まず壺井栄の作品の中から「勉強」という語をひろいだし、次に文脈上の意味を確認することにした。

なにしろ壺井栄の作品は一四二八点（「人物書誌大系　26　壺井栄」iii頁・鷺只雄編・日外アソシェーツ・一九九二）もあるにもかかわらず、本稿のために調査した作品は百点前後にしかならない。しかしながら「勉強」という語の使用例をあげ、その意味を分類していくことは、「石臼の歌」の中で使用された理由を解き明かすには十分であろう。

ともあれ、調査の対象にできた作品（文献）名を記しておく。

A　「壺井栄全集　1・2・4・7・8・10」筑摩書房　昭和四十三年
B　「定本　壺井栄児童文学全集　1・2・3・4」講談社　昭和五十四年
C　「壺井栄名作集　現代日本文学全集」偕成社　一九五〇
D　「壺井栄児童文全集　1・2・3・4」講談社　昭和三十九年
E　「昭和文学全集　平林たい子・壺井栄集」角川書店　昭和三〇年
F　「二十四の瞳」　角川書店　昭和六十二年
G　「母のない子と子のない母と」　新潮文庫　昭和三十三年
H　「日本文学　49　佐多稲子・壺井栄」中央公論社　昭和四十三年
I　「少年少女日本文学全集　15　壺井栄・林芙美子集」　講談社　昭和三十八年
J　「壺井栄名作集I　花はだれのために」ポプラ社　昭和四〇年
K　「二十四の瞳」　角川文庫　昭和三十六年
L　「佐多稲子・壺井栄集」　講談社　昭和三十九年

記載の順序は次の通りである。

「作品名」（発表年）（出典）頁・行・分類[補注]

1　「風車」（昭和十四年）（Aの7）
　①三七頁下八行　a
　②三七頁下十一行　a

2
「暦」（昭和十五年）（Aの7）
③百八六頁下十七行　a

3
「艪」（昭和十五年）（Aの8）
④八二頁上十九行　a
⑤八三頁上三行　a

4
「小豆飯」（昭和十六年）（Aの7）
⑥二九一頁十五行　a

5
「女傑の村」（昭和十六年）（Aの7）
⑦二四二頁下一行　a

6
「ともしび」（昭十六年）（Aの10）
⑧一七九頁下三行　a
⑨一八〇頁下二行　a
⑩一八五頁上九行　a
⑪一九四頁上一行　a
⑫二〇八頁上十五行　a
⑬二〇八頁上十九行　a

7
「小さな先生大きな生徒」（昭和十六年）（Bの1）
⑭五八頁下十行　a

8
「十五夜の月」（昭和十七年）（C）
⑮一八一頁上十一行

9
「ユウガオのことば」（昭和十八年）（Bの1）
⑯七六頁二行　a
⑰八一頁八行　a
⑱八四頁四行　a
⑲八四頁六行　a

10
「坂下咲子」（昭和十八年）（Aの10）
⑳二六七頁下十二行　a
㉑二六七頁下十五行　a

11
「石臼の歌」（昭和二〇年）（Bの1）
㉒九八頁十二行　a
㉓九九頁十四行　b

12
「小さな物語」（昭和二一年）（I）
㉔二〇九頁下八行　a

13
「ベアちゃん」（昭和二一年）（Bの2）
㉕二二七頁十四行　a

14
「めがねと手袋」（昭和二一年）（Aの8）
㉖一一一頁上八行　a

15 「大きくなったら」（昭和二二年）（Bの1）
㉗一七〇頁八行　d
㉘一七二頁十行　a

16 「渋谷道玄坂」（昭和二二年）（Aの8）
㉙一四五頁下八行　a
㉚一四九頁下十九行　a

17 「りんごの袋」（昭和二二年）（Aの10）
㉛一〇六頁上十五行　a
㉜一〇六頁上十六行　a
㉝一一〇頁下十二行　a
㉞一一一頁上二〇行　a

18 「ヤッチャン」（昭和二二年）（I）
㉟二四四頁上三行　a

19 「おべんとう」（昭和二三年）（Dの1）
㊱二〇三頁七行　d
㊲二〇三頁八行　d

20 「あたたかい右の手」（昭和二三年）（Bの3）
㊳三一五頁十九行　a

21 「捨吉とすて犬」（昭和二三年）（Bの2）
㊴二三五頁十行　a
㊵二三五頁十四行　a

22 「柳の糸」（昭和二三年）（I）
㊶一九六頁上三行　a

23 「ロー石」（昭和二三年）（Bの2）
㊷二二二頁十行　d

24 「赤いずきん」（昭和二三年）（Bの2）
㊸一九七頁十五行　a

25 「夏みかん」（昭和二三年）（J）
㊹一四八頁三行　a

26 「たからの宿」（昭和二四年）（Aの8）
㊺二一一頁下三行　c

27 「桟橋」（昭和二五年）（Aの8）
㊻二七七頁上十五行　a
㊼二七八頁上一行　a

28 「やぎ屋のきょうだい」（昭和二五年）（Bの2）
㊽二七八頁十九行　a

29 「美鈴のネコ」（昭和二五年）（Bの4）

㊾一六四頁下七行　a

30

「サツキの歌」（昭和二五年）（Bの2）

㊿二八八頁上十一行　a

51二八八頁上十四行　a

52二八八頁上十五行　a

53二八八頁下十行　a

31

「二十四の瞳」（昭和二六年）（K）

54五頁十五行　a

55四九頁九行　d

56八〇頁十二行　a

57八一頁十三行　a

58八一頁十六行　a

59一〇六頁八行　a

60一三二頁八行　a

61一五六頁四行　a

62一五七頁十行　a

63一六〇頁三行　a

64一七一頁十五行　b

32

「母のない子と子のない母と」（昭和二六年）（Bの2）

65六〇頁一行　a

66六〇頁四行　a

67六四頁十二行　a

68六四頁十五行　a

69六四頁十九行　a

33

「坂道」（昭和二六年）（Bの4）

70十五頁下十九行　a

71十六頁上二行　a

72十六頁上三行　a

73十六頁上六行　a

74十七頁上二行　a

34

「岸うつ波」（昭和二八年）（Aの1）

75一〇一頁上十一行　a

76一六一頁上三行　b

35

「風」（昭和二九年）（L）

77二五四頁上十六行　a

36

「風の子」（昭和三三年～昭和三四年）（Bの4）

78二二七頁下六行　a

37

「えくぼ」（昭和二九年）（Bの3）

79一七七頁十六行　a

38

「裲襠（うちかけ）」（昭和三〇年）（L）

80三六六頁下二〇行　a

㉛三六八頁下十行　a
㉜三八二頁上十行　a

39「帳面をけそう」（昭和三三年）（Bの4）
㉝二九二頁上十四行　a
㉞二九二頁下二行　a

一、「勉強」という語のでてこない作品

（　　）内は発表年

「プロ文士の妻の日記」（昭和四年）・「屍を越えて」（昭和七年）・「長屋スケッチ」（昭和十年）・「月給日」（昭和十年）・「大根の葉」（昭和十三年）・「まつりご」（昭和十五年）・「廊下」（昭和十五年）・「桃栗三年」（昭和十五年）・「赤いステッキ」（昭和十五年）・「大黒柱」（昭和十六年）・「寄るべなき人々」（昭和十六年）・「餓鬼の飯」（昭和十六年）・「あひる」（昭和十六年）・「裁縫箱」（昭和十六年）・「甲子と猫」（昭和十七年）・「五目ずし」（昭和十七年）・「薮がらし」（昭和十七年）・「おみやげ」（昭和十七年）・「垢」（昭和十七年）・「小さなお百姓」（昭和十七年）・「同い年」（昭和十七年）・「おるすばん」（昭和十八年）・「まないたの歌」（昭和十八年）・「妙貞さんの萩の花」（昭和十九年）・「港の少女」（昭和十九年）・「海風」（昭和十九年）・「むかしの学校」（昭和二〇年）・「峠の一本松」（昭和二〇年）・「紺の背広」（昭和二〇年）・「お母さんのてのひら」（昭和二一年）・「表札」（昭和二一年）・「ふたたび」（昭和二一年）・「窓」（昭和二二年）・「妻の座」（昭和二十二年）・「霧の街」（昭和二二年）・「あばらやの星」（昭和二二年）・「朝夕の歌」（昭和二二年）・「あんずの花のさくころ」（昭和二二年）・「浜辺の四季」（昭和二二年）・「朝の歌」（昭和二二年）・「種」（昭和二三年）・「耳からごほうび」（昭和二三年）・「孤児ミギー」（昭和二三年）・「窓口」（昭和二三年）・「履歴書」（昭和二三年）・「初旅」（昭和二三年）・「柿の木のある家」（昭和二四年）・「晒木綿」（昭和二五年）・「屋根裏の記録」（昭和二五年）・「振袖と野良着」（昭和二六年）・「可愛い手」（昭和二六年）・「ピアノ」（昭和二七年）・「かんざし」（昭和二八年）・「矢車草」（昭和二九年）・「あしたの風」（昭和二九年）・「草の実」（昭和三〇年）・「伊勢の的矢の日和山」（昭和三〇年）・「雑居家族」（昭和三一年）・「極楽横丁」（昭和三一年）・「あす咲く花」（昭和三五年）・「日めくり」（昭和三八年）・「海の音」（昭和四〇年）

二

当初予想した通り、壺井栄はやはり「勉強」という語を多用する作家であることが判明した。三九の作品で八四例もある。今回調査できなかった作品での使用例を加えると、かなりな数にのぼると推測できる。

「石臼の歌」での使用例は二例で、Ⅰの分類に従うと文脈上の意味はaとbである。全使用例のうち圧倒的に多いのはaで、bは「石臼の歌」での使用例を除くと二例である。

壺井栄の作品創作の大きな要素として「勉強」概念があることが把握される。

それでは、壺井栄に即して考えると「勉強」はどのような意味を持っていただろうか。壺井栄の年譜（「人物書誌大系　26　壺井栄」鷺只雄編・日外アソシェーツ　一九九二・一九三頁～二四六頁）によると、壺井栄は祖母イソ（話し好きで、孫たちを育てながら沢山の昔話や伝説を語り、子守唄を唄って倦むところがなかった）にかわいがられ、明治三八年坂出尋常小学校に入学。二年生以後級長をつとめた。明治四二年家運が傾き、他家の子守に雇われて通学。明治四三年には実家が破産。教師を志望していた栄の計画ではとりあえず高小に行き、その間に家計の好転を期待して師範学校に進む予定であった。苦労しながら大正二年に内海高等小学校を卒業。この間、兄から送られてくる雑誌を読んでいた。しかし、学歴としては高等小学校が最後で、後は働くことになる。

このような経歴からわかるように、学びたいという欲求はありながら果たされなかった自分の学令期の思いが[注3]「勉強」という語になって作品中に出てくるのであろう。

結末部において、極度に作中世界に高揚してしまった作者としての壺井栄が（全く不用意だと私は思うのだが）積年の思いと共に飛び出してしまったものと考えられる。そのことは作品の論理からとらえられる。石臼のひき手と石臼の関係からも言える。石臼は最初は単に物理的存在として登場する。臼は、おばあさんの言うとおり、だんごがほしけりゃ臼回せと、言っているように千枝子には聞こえる。そして、おばあさんのことばによる臼の質的変化、つまり、「臼は、そのときそのときの人間の心持ちを、そのまま歌いだすものだよ。」（傍点……引用者）がある。臼のひき手の心を反映するのは、次の臼の歌「お姉さんだよ、お姉さんだよ」でも同じである。しかしながら、結末部における「勉強せえ、勉強せえ、つらいことでもがまんして――。」を千枝子の心の反映とみることはむずかしい。というのは、「――せえ、――せえ」の口調は千枝子の話体ではないということが作品中の千枝子の他の会話文の話体と比べて言えるからである。「壺井栄全集　第一巻」（筑摩書房・昭和四三年）所収の「岸うつ波」（同書九九頁下十行）で母（実は祖母）がなぎさに言う「……（略）……年子姉ちゃんのいうのも、無理もないことじゃ。辛抱せえ、辛抱せえ。」（略・傍点……引用者）という会話文の中に同一の語尾表現が出てくるが、それを言っているのは、なぎさが母だと思っている祖母である。「～せえ」の表現は一般的に言っても年寄りくさいし、前述したことからも、少なくとも若い者の表現ではなかろう。また意味の上から考えて千枝子が自分自身に対して心の中で思うことばと取ることはできない。すると、この歌は誰の心持ちを歌い出したのであろうかという問題がおこる。「精も根も」つきはてたおばあさんの心持ちととるのは、作品の論理からも、読者の論理からも無理がある。しかしながら、壺井栄の作品を読んで気づくのは、作中人物におばあさんが登場し、そのおばあさんの描かれ方が、実に人生の知恵を味わい深くまわりのものに諭していく存在であるということである。おそらく壺井栄はここでおばあさんに臼をひかせるのが順当であったにもかかわらず千枝子と瑞枝にひかせてしまったという誤算をしてしまったのであろう。

あまりにも唐突で作品の論理が乱れているこの部分は、執筆期間が短かく、作品のつめの部分で結論を急ぎすぎたゆえのものであろう。

「生活の歌」（壺井繁治・「定本　壺井栄児童文学全集　2」所

収　三〇四頁）に次のような記述がみられる。

「一般に『童話』といわれる文学には、自由奔放な空想や、また、ファンタジーのおりまざった作品のほうがおおいようではあるが、かの女の童話にはそういう傾向はあまり見られず、一見しごく日常的である。」

この作品をファンタジー作品とみると、どうなるであろうか。虚構性がひじょうに高く、現実の因果律を適用すると作品が破綻する場合においても、作品の論理は整合していないと作品として成立しないことは言うまでもないことである。したがって虚構性の高いファンタジーととらえることはできない。

作品の成立から結末部の問題を考えてみよう。「石臼の歌」は昭和二〇年九月に「少女倶楽部」（八・九月合併号）に掲載されている。広島への原爆投下と敗戦から一月足らずの間に書かれた作品である。原爆と敗戦は壺井栄にとって、原爆と戦争として非人間的な対象であり、敗戦自体については感懐をたどれるものはない。そのことは、マルキストである夫・繁治と共に、そのシンパであった壺井栄が当時の一般的国民の戦時下コンテクストになかったことを意味し、戦後の反戦活動[注4]から考えて、一線を画していたものと推測できる。

以上のようなことから、原爆によって父母を失った瑞枝や、子どもを失ったおばあさんは壺井栄にとって、当時の大多数の国民を代表する存在であり、何とかして励ましてやりたい[注5]という結論が先にあり、作品として書いてはみたが結末部において作品の論理の破綻を招いた作品としてとらえられるのである。

注

注1　「これだけ、計算しつくした構成によって作品が書かれているのに、なぜ、あの状況下で『勉強せえ、勉強せえ』と作者は書いたのだろうか。十何年前の研究大会でも、参加者は、『勉強せえ』にこだわり、他にもっと表現できる言葉はなかったのだろうかという発言があった。また、『子供には勉強を』という作者の固定した観念があるのではないかという人もいた」（『石うすの歌』の教材研究と全授業記録」　実践国語研究　一九九二　NO一一六　二三頁所収）

注2　たとえば壺井栄の作品世界を五十嵐康夫は次のようにとらえているが、他の文献でも大同小異なとらえ方をしている。

1、庶民的世界が描かれている。

2、深い真実感とあたたかな人間愛のモラルと情感がにじみ出ている。

3、地方性、郷土性の描写

4、平易なことば・ユーモア

（「壺井栄　児童文学作品を中心に」五十嵐康夫　『国文学　解釈と鑑賞』所収　至文堂　第五〇巻一〇号昭和六〇年九月号所収）

注3　「家が貧困であるがゆえに、義務教育もおえられない少女、勉強ができても進学できぬ少女、破産した家の犠牲に犠牲になっていく少女、古い家にしばられて天分をのばすことのできない少女ここ〝家〟の重荷が、とくに女の生き方を早くから暗い運命の方におしやることを見のがさずに描きこんでいる。」（「壺井栄における〝家〟の問題」木村幸雄　『國文學　解釈と教材の研究』所収　學燈社　昭和四六年十一月号）という作品の傾向も壺井栄の経験からでたものであろう。

注4　「わたしはもう、これからは度胸をすえて、再軍備反対の立場に立って、あらゆる仕事をしていきたいと思っています。私の創作意欲をそそるものは、いまのところそればかりのようです。」（「わたしの童話はどうして生まれたか」壺井栄　『定本　壺井栄児童文学全集　3』所収　二九五頁）というように戦後は、はっきりと反戦の立場を示している。

注5　「『第二次世界大戦で日本のおちこんだ不幸は、終戦六年の今日、

まだそのきずあとのうずきはつづいています。戦争は、人類に不幸をしかもたらさない。――　このことを頭の中において、そのきずあとのうずきをなめて、いやして、立ちあがろうとする人たちの美しさを、自分をも力づけながら、書いたつもりですが。』ともいいました。人間はひとりで生きていけるものでなく、つねに複数で生きています。だから、「立ちあがろうとする人の美しさ」ではなく「立ちあがろうとする人たちの美しさ」が書かれたのでした。」「解説」古田足日　「定本　壺井栄児童文学全集　2」所収　三一一頁）の中にあるように「力づけ」ることは他の作品中にも見られ、作品を特色づけるものになっている。

補注

文脈上の意味によっておおよそ次のように分類した。

a　狭義の意味で学ぶということ。学校での勉強・試験勉強等

b　広義の意味で人生におけるさまざまなことから学んでいくということ

c　プロレタリア文学に対する理解

d　技能を身につけるための努力

（その他商品を安く売るという意味での例も一例ある）